

2. 低温・高湿下における留意点

(1) 病害発生 の留意点

- ① 灰色かび病など低温下や高湿下で発生しやすい病害に特に留意し、予察の徹底・防除体系の見直しをおこなう。
- ② 罹病葉は、早めに摘除し、ハウス外に小まめに処分する。
- ③ 近紫外線不透過型フィルムを利用する。

表Ⅲ-2-1 主要病害の発生に好適な温・湿度条件【引用文献 24) より転写】

病害名		多湿	乾燥	発病適温 (°C)
トマト	疫病	○ (100)		20
	葉かび病	○ (80~100)		20~23
	灰色かび病	○ (90~100)		20
	うどんこ病		○ (85~95)	23
	斑点細菌病	○		27~30
	青枯病			30 (地温)
	萎凋病			27~28 (同)
	根腐萎凋病			10~20 (同)
	褐色根腐病			13~18 (同)
	半身萎凋病			23~28 (同)
ナス	うどんこ病		○	25
	灰色かび病	○		20
	黒枯病	○ (100)		25
	菌核病	○		15~24
	青枯病			30 (地温)
	半身萎凋病			23~28 (同)
ピーマン	うどんこ病		○ (60~70)	25
	灰色かび病	○		20
	疫病	○		28~30
	青枯病			30 (地温)
キュウリ	べと病	○ (95~100)		20~25
	うどんこ病		○ (45~75)	25
	灰色かび病	○		20
	菌核病	○		18~20
	黒星病	○		17
	斑点細菌病	○ (90~100)		25
	疫病	○		28~30
	つる枯病	○ (95~100)		20~24
	つる割病			24~27 (地温)
メロン	うどんこ病		○ (45~75)	25
	べと病	○ (95~100)		20~25
	つる枯病	○		20~24
	つる割病			24~27 (地温)
	黒点根腐病			25~30 (同)
イチゴ	うどんこ病		○ (45~95)	20
	灰色かび病	○		20
	炭疽病			30
	萎黄病			25~30 (地温)
	萎凋病			20~25 (同)

注) ○印は発生に好適であることを示す。()内の数字は相対湿度

表 II-2-2 近紫外線透過性による被覆資材の分類と適用場面【引用文献 25) より転写】

種類	透過波長域	近紫外線透過率	適用場面	適用作物（病害虫）
近紫外線強調型	300nm以上	70%以上	○アントシアニン色素による発色促進	ナス、イチゴ、ブドウ、リンゴ、イチジク、モモ、スモモ、中晩柑、赤・紫・青色系の花（チューリップ、キキョウ、デンドロビウム他）
			○蜜蜂の行動促進	メロン、イチゴ
紫外線透過率	300nm以上	50%±10	○汎用	ほとんどの作物
近紫外線透過抑制型	340±10nm以上	25%±10	葉茎菜類の生育促進	ニラ、ホウレンソウ、コカブ、レタス他
近紫外線不透過型	380nm以上	0	病害虫防除	イネ菌核病、ホウレンソウ萎凋病、ネギ黒班病、灰色カビ病他、ミナミキイロアザミウマ、ハモグリバエ、ネギコガ、アブラムシ等

（参考）

近紫外線不透過型使用上の留意点

- ① 主に、孢子形成における光依存性が高い糸状菌による空気伝染性病害や、色彩反応性を有する昆虫（アブラムシ等）によって媒介されるウイルス病にのみ有効
- ② ミツバチ等の訪花昆虫による、受粉が阻害される。
- ③ ナスの紫紺色などアントシアニン系色素の形成が抑制される。